



外国為替の変動をAIで予測し、新サービスを提供

DATA

活用領域・解決する課題	・新しい金融サービスの開発 ・顧客の利便性向上
テクノロジー・デバイスキーワード	AI、Fintech、スマートフォン、モバイルアプリ



決済・商品開発ユニット
IT戦略部 主任 満尾芽依氏(写真右)
商品開発部 調査役 鈴木絢子氏(左)
(2019年2月現在)

資産を増やす投資の1つである外貨預金。関心はあるが、売り・買いのタイミングが難しく二の足を踏む人も多いなか、2017年からAIを使って預入をアシストするサービス「AI外貨予測」「AI外貨自動積立」を提供しているのが、じぶん銀行である。

同行は、KDDIと三菱UFJ銀行の出資で設立されたモバイルファーストのネット銀行であり、預金やローンなどの金融サービスを提供する。

為替レートのAI予測をわかりやすく表示

外国為替レートの変動をAIを使って予測できないか——同社がここに着眼したのは2016年だった。米国で実績を出したFintech分野のスタートアップ企業・AlpacaJapan(以下アルパカ社)との出会いもあり、IT戦略部主任の満尾芽依氏は、「外貨予測サービ

ス」の開発に着手。2017年にサービスを開始した。

「データが豊富にある金融分野はAIとは親和性が高いと感じていました。AIによる予測は、アルパカ社が保有する過去10年分のチャート画像を機械学習させたデータを用いて開発しました」

対応通貨は米ドル・ユーロ・豪ドル・南アフリカランド・NZドルの5つ。予測値は1時間後、1営業日後、5営業日後の3ポイントとし、定期的に更新。高い確率で上昇が予測される場合はプッシュ通知を行う。

構築にあたり工夫したのは、「情報の表示の仕方」である。

数値を並べるだけでは従来からの「難しさ」を醸し出してしまふ。満尾氏は、「スマホで見やすい画面であること、またアイコンを使って初心者でも直観的にわかるようにしました。デザ

イナーの方と何度も話し合いました」と振り返る。

このユーザーインターフェースも奏功して、サービス開始後の1年で同行の外貨残高は約3割増加したという。また、予測精度は70%を示している。

毎月の買い時予測で外貨を自動購入

もう1つの「AI外貨自動積立」は、毎月1回、AIが割安と判断したタイミングで外貨を一定額購入するサービスである。商品開発部調査役・鈴木絢子氏は次のように説明する。

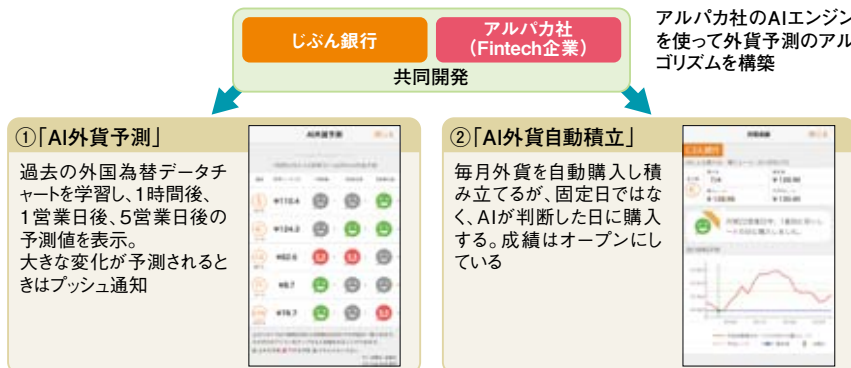
「過去の外国為替データに株式指数など、いくつかのデータを加味して学習させました。データが多ければよいわけではなく、関連性については研究を重ねました」

結果を見ながら、AIエンジンの変更も行っていくという。

AI外貨自動積立は、順調に利用数が増えており、毎月決められた日に購入するタイプの2倍の利用数を示している。

totoやカードローンの与信など、AIが役立つ分野はまだ多く、その他の金融商品においても引き続きサービス開発を進めていくとのことだ。

図 AIを活用した外貨サービス



*通貨は「米ドル」「ユーロ」「豪ドル」「南アフリカランド」「NZドル」の5種類

ユーザー部門

ソリューション部門